

1) 子供が少なくなる理由

① 少子化は歴史の必然

和田医師は他の専門家の意見を援用しながら、少子化は経済発展に伴う歴史的必然であると述べている。

少子化は経済発展と強い相関をもつもので、女性の教育程度や職業参加の高度化、さらに女性の結婚前の生活レベルなどが強く影響するという。そこで日本も女性が参加する高度産業社会となった以上、少子化は避け難いものである²⁰⁾。

② 若い女性が子供をつくらない理由

東京学芸大学の山田昌弘助教授によると、いまの若い女性が子供をつくらない理由は、仕事を続けたいからではなく、現在の生活レベルを維持したいからだという。親元から通う女性にとっては、結婚して共稼ぎしても、結婚前の生活レベルの維持は困難である。要するに親なみの収入のある夫を選ばないと生活レベルは落ちるから、なかなか結婚しようとしなないのだという²¹⁾。

③ 金持ちの子たくさん

このようなわけで、今日では相当に富裕な家でないといく多くの子供は望めないという。子供が何人もいる家庭は広いお屋敷があって、お手伝いさんを二人も三人も雇える家庭だそうである。高度成長期から30年がたち、バブル期から10年を経て、親も子もぜいたくが当たり前となった時代には、豊かでも楽な暮らしが保証されないかぎり、子を多く持とうとしなくなったのである²²⁾。

④ 若い女性の望ましい主婦像

今の若い女性が結婚後に描く望ましい主婦像は仕事と育児を両立させていく「ワーキングマザー」ではなく、「生活を楽しめる主婦」である。彼女は夫には仕事だけでなく家事への協力を求めるとともに、自分は育児と趣味(的仕事)を両立させ、生活を楽しむ主婦である。このような新しい男女の役割分担を求める傾向を「新・専業主婦志向」と呼ぶ人もいる。

もしこれが充たされないなら独身で仕事を続

け、結婚しないというのが彼女等の本音であると推測される²³⁾。

以上、和田医師も少子化は現代の若者が豊かな社会の生活様式にどっぷりとつかって、これなしには生活出来なくなっており、これと矛盾し、これをおびやかすような子育ては望まないのだという意見である。これは主婦がワーキング・マザーを目指さない点を除けば、先の厚生白書の分析とほとんど一致する見解である。

2) 少子化社会は恐くない

ところで和田医師の論文の主な目的は「少子化社会は恐くない」ことを主張することにある。これについても簡単に要約しておこう。

① 労働力不足

和田医師によると、厚生白書も指摘している労働力が不足するのは60歳を定年としているからであって、これを延長することによって解決出来る。老年学では高齢者を75才で区分し、75才までをヤングオールド、76才以上をオールド・オールドと呼ぶならわしがある。若し75才までのヤングオールドを労働力化すればこの問題はほとんど解決するのだという。この年代の人口のうち虚弱老人は5%程度に過ぎないから、95%の人は元気で何らかの労働につける筈である。この人達については身体機能の低下が危惧されることがあるが、知的な機能も中高年と遜色のないものを持ち合せているという。この点がよく理解されると若年労働力が少々減少しても不安はないと和田医師は主張している²⁴⁾。

② 財政的困難

財政面でみても、若年労働力が減る分、ヤングオールドの就職機会が増えるので年金財政も楽になるはずである。次に子供が少なくなった為に浮いて来る文教予算を高齢者に転用することによって介護費用も十分にまかなえる筈である。このようにヤングオールドの活用によって財政的にも十分対処出来る筈である²⁵⁾としている。

③ 文化・技術の衰退

20) 和田秀樹「少子社会は恐くない」PHP『Voice』1998年11月号 167頁

21) 同上 168頁
 22) 同上 169頁
 23) 同上 168頁
 24) 同上 170頁
 25) 同上 171～172頁